武家の妖怪退治譚

――中近世における土蜘蛛退治説話の変容――

本多康子

要旨

源頼光とその家来である四天王が土蜘蛛を退治する説話は、様々な文芸作品として享受され展開していった。

土蜘蛛は、古くは記紀神話において朝廷に服属しない一地方勢力としてその存在が語られていたが、中世になり、お伽草子の武家物というジャンルの中で新たに妖怪退治譚として再構築された。この中世における物語文脈の転換を契機として、妖怪としての土蜘蛛退治の「語り」は、テクストの枠を超えて絵画や芸能へと裾野を広げて展開したのである。本稿では、特に中近世にかけての土蜘蛛退治譚の変遷と、それを題材に制作された絵画作品がどのように受容されたかを考察する。

清和源氏を出自とする源頼光とその家来である四天王らの妖怪退治譚が、軍記物語に付随する伝承として生成されやがて独立した物語として発展した背景には、中近世にかけて軍記物語の古典化と周辺説話の再編成がなされたことが密接に関連する。とりわけそれらの最たる受容者であった「武家の棟梁」将軍家周辺による「語り」の管理と継承が及ぼした影響について着目し、「武家による妖怪退治譚」に仮託された政治性を読み解きたい。

はじめに―土蜘蛛退治譚の展開

源頼光とその家来である四天王が土蜘蛛を退治する説話は、様々な文芸作品として享受され展開していった。土蜘蛛は、古くは記紀神話において朝廷に服属しない一地方勢力としてその存在が語られていたが、(注1) 中世になり、武家説話というフレームの中で、退治すべき妖怪としての姿を与えられていく。この中世における物語文脈の転換を契機として、妖怪としての土蜘蛛退治の「語り」は、テクストの枠を超えて絵画や芸能へと裾野を広げて展開したのである。本稿では、特に中近世にかけての土蜘蛛退治譚の変遷と、それに関連した絵画作品がどのように受容されたかを考察する。現存する土蜘蛛退治譚とその絵画は、左記の如く大きく二つの物語文脈のもとで分類されている。(注2)

〈化物屋敷型〉…源頼光と渡辺綱が、都の外れにある荒れ果てた屋敷を探索して、土蜘蛛を退治する。

・東京国立博物館所蔵『土蜘蛛草紙』（以下、東博本）

・東京国立博物館、大英博物館、国際日本文化研究センター所蔵『土蜘蛛草紙』（東博本古絵巻の模本）

〈頼光瘧発病型〉…源頼光が瘧で倒れ、僧形の妖怪（土蜘蛛の化身）が頼光を襲う。後日家来の四天王（渡辺綱、坂田金時、碓井貞光、卜部季武）たちが山中に潜む土蜘蛛を退治する。

・慶應義塾図書館所蔵『土くも』（以下、慶應本）

・国立国会図書館所蔵『平家物語剣之巻』（以下、国会図書館本）

・国立歴史民俗博物館所蔵『土蜘蛛草子』（以下、歴博本）

その他、土蜘蛛退治を題材にした版本や浮世絵による挿画・一枚絵として受容された。

東博本は土蜘蛛退治譚を絵画化した現存最古の絵巻だが、その物語内容は後世に継承されず、江戸時代における狩野派絵師の古典学習の作例として、数点模本が制作されるにとどまる。一方、『平家物語』『太平記』などの軍記物語によって語られる土蜘蛛退治譚は、謡曲などの芸能の分野にも広く採りいれられ、やがて慶應本や歴博本に継承されていく。後者はより広く着実に巷間に流布し[注3]そのイメージが定着したようだ。このように、土蜘蛛退治譚が軍記物語に付随する伝承として生成され、やがて独立した物語として発展した背景には、中近世にかけての軍記物語の古典化と周辺説話の再編成が考えられよう。本稿では、とりわけそれらの最たる受容者である武家の棟梁、即ち将軍家周辺による「語り」の管理と継承について着目する。

一、中世における土蜘蛛説話の受容と展開

先学が指摘するように、土蜘蛛退治譚の大きな転換点は、古代での「朝廷による異民族・朝敵征伐伝承」から、中世での「英雄による妖怪退治譚」へと変容した点である。

美濃部重克氏は、「大和朝廷の王権・王威対〈まつろはぬもの〉から清和源氏の武力・武威対〈まつろはぬもの〉へと変容」したと説かれた[注4]。古代において、記紀神話や風土記に頻見する土蜘蛛征伐の物語は、帰順しない異民族を下し大和朝廷の王権を確立する物語であった。しかし中世では、朝廷の持つ王権や王威に代わり、清和源氏の武威によって〈まつろはぬもの〉を降し天下の安寧を守るという源氏称揚の思想が萌芽した。こうした思想を背景に、朝廷から幕府への権力移行にともなって武家政権の正統性を強調するイデオロギーを巧妙に取り込んだ物語が生成された。そして後世の足利将軍による室町幕府、徳川将軍による江戸幕府といった歴代の清和源氏を祖とする武家政権の権威を

支える「語り」の装置となったのである。土蜘蛛退治譚の文脈もまた、例外なくその「語り」に組み込まれ時代的変容を遂げたといえるだろう。朝廷による異民族征伐譚から英雄による妖怪退治譚という寓話のフレームの変換は、武家のみならず一般の大衆にも受け入れられやすい物語となり、受容層の拡大と浸透の加速へと繋がったと考えられる。

一‐i、東博本『土蜘蛛草紙』の土蜘蛛退治譚の特徴と意義

前述したように、東博本は他の土蜘蛛退治譚諸本には類を見ない展開と土蜘蛛が変化する多種多様な妖怪の造形が特徴的であり、話型にも著しい隔たりがある。

簡単に概要を述べると、源頼光が渡辺綱を伴って北山の蓮台野に行き、空を飛ぶ髑髏を発見する。それを辿っていくと神楽岡の貴族の邸宅跡に着く。そこで、二百歳余りの皮膚が垂れ下がった奇怪な老婆、古道具や動物の姿をした妖怪たち、異様に大きな顔の若い尼、女房装束の美女の化身〔図1〕などの異形のものたちに次々に遭遇する。にわかに変化して襲い掛かる女の化身と応戦し、その血痕をたどり、道中渡辺綱の機転で危機をくぐりぬけながらある穴倉に至る。〔図2〕中から巨大な蜘蛛が現われ、主従で力を合わせてこれを退治する。〔図3〕この功績により、時の帝から源頼光は摂津守、渡辺綱は丹波守の位を賜るという内容である。ここで特に注目すべきは、土蜘蛛が様々な異形のものに変化して化物屋敷のなかで主従を幻惑するという設定と、登場人物が源頼光と渡辺綱主従二人のみであることである。

まず、東博本に登場する土蜘蛛と妖怪たちは、古代記紀神話における、大和朝廷に従属しない異民族「土蜘蛛」のイメージを骨子とし、『白氏文集』や『和漢朗詠集』などの漢籍を典拠とした詞書によるレトリカルな肉付けを経て、さらに地獄絵から着想を得た様々な異形の姿で描かれる。様々な妖怪変化の「顔」を持つ土蜘蛛は、中世の多種多様

な社会的風潮や文化的土壌の文脈上に培われた造形である。図像とテクスト、それぞれの背景にある古典的教養が響き合う多層的な表象によって「朝敵」と「多様な妖怪変化」の二重構造のイメージが成立したといえるだろう。(注5)

そして頼光四天王のなかでの頼光と綱主従の焦点化は、二人の共通項である両者の「源氏」としての血脈の密接な繋がり（頼光は清和源氏の嫡流にして摂津源氏の祖、綱は嵯峨源氏の流れをくむ仁明源氏の後裔）に依拠するもの(注6)である。〔図4〕東博本は一連の「剣巻」系統の物語内容とは異なるものの、土蜘蛛を朝敵とし、一方で源氏を朝敵を征伐し王権を守護するものとしてみなす二項対立の思想は、次の頼光の台詞にも表われている。

「土蜘蛛草紙」第十段（傍線は筆者による）

天照大神、正八幡宮に祈念す、我朝は神國なり、神は國をまほり給、國はまた、帝のほうしむをもておさむ、われはまた、臣として、しかも□（王）孫なり　われ十善の、よけいの家に生まれ、いま、この物を見るに、畜生なり、畜類は極悪無間、破戒無残のゆえにこの道に生を受く、しかも、國に患いをなす、人の仇となる　我すなはち、帝をまほる兵なり、國をおさむる、片手なり、汝従はざらんと、…

こうした二つの家の強固な結びつきは特筆すべきものであり、摂津源氏と渡辺党との帰属関係は時代を超えて継承される。例えば、源頼政とその麾下である渡辺党の武士たちの活躍は『平家物語』『平治物語』『保元物語』の様々な軍記物語によってその逸話が語られ、フィクションとしての「語り」と歴史事象との重層的な構造のなかで、互いの関係性の深さを示している。(注7) つまり東博本において、冒頭に頼光と四天王が描かれているにも関わらず、いつのまにか頼光、綱主従のみの土蜘蛛退治として物語が進行するのは、意図的な狙いがあったと考えられる。様々な文化的位

相の困難や障害の象徴たる土蜘蛛を退治できるのは、頼光四天王の中でも選ばれた源氏の二人のみであり、妖怪退治譚の枠組みを利用した源氏称揚という制作目的が示唆できるのである。このように、本来「武威」の象徴として語られてきた頼光と綱に、新たに「文化の継承者」としての造形を付加することによって、源氏が従来から有する王権守護に基づく「武」の正統性に、「文」の継承による伝統性を取り込んだ東博本は、従来に比して画期的であったと言えるだろう。

東博本における図様表現と物語は、鎌倉時代末期からの政治的混乱が続くなかで、軍記物語を母胎とした武家の神話たる源氏宝剣説話と、その周縁としての縁起やお伽草子が次々に成立していく揺籃期の中に位置づけることができるだろう。(注8)

一-ii、軍記物語『平家物語』『太平記』周辺の「剣巻」における土蜘蛛退治譚

東博本から少し時代が下った室町時代における土蜘蛛退治譚は、『平家物語』や『太平記』などの軍記物語とそれに付随する「剣巻」で語られる源氏伝来の刀剣伝承や説話集、辞典、そして謡曲などの芸能によって広く展開した。これらを概観してみると、それぞれに摂取された土蜘蛛退治譚は、古代の記紀神話における大和朝廷の「朝敵」土蜘蛛征伐と頼光四天王らによる「妖怪」土蜘蛛退治を典拠とするもの二つの要素が確認できよう。しかし、「剣巻」のテキストのなかでも比較的初期のころに成立したとされる屋代本には、記紀神話における「朝敵のはじめ」土蜘蛛の由来については書かれていない。(注9) 中世の土蜘蛛退治譚において、古代の大和朝廷による土蜘蛛征伐譚の挿入は、王威による異民族征伐を行う王権物語から武威によって王権守護を担う武家政権の物語へと置換を行う際の重要な意味を持つ。このことを勘案すれば、この古代と中世の二つの土蜘蛛退治譚が互いに共鳴することによって、源氏の武威の正統性

が強調され、時には思想面で政権基盤を支えたのである。とりわけ政治的混乱期においては、その「語り」の効力がより一層切実に求められたのであろう。

『塵添壒嚢抄』土蜘…作者不詳。二十巻。天文元年（一五三二）成立。

上古に土蜘と云ひて朝威をいるがせにするものありと見ゆ、其の姿はくもの如くなるなり。南都に常明がかきたる数巻の六道の絵あり、畜生道の分に土蜘をかづらの網をして、とらへたる事をかけるには、おそろしげなる大蜘を書きたり、是は僻事なり。

『榻鳴暁筆』第十六霊剣「一源家鬼切付くも切、小がらす」〔室町時代後期ごろ成立か〕

（中略）又蜘蛛切と申侍るは、紀伊国名草郡に大なる森有り。彼所に全身鉄にて広大の蜘蛛あり。家をはる事　辺境にみちたり。故に空を飛つばさ、かしこに至りてかゝらずといふ事なし。地をはしる獣を又悉くとり食けり。剰其後は近里往復の村民、旅客を取食事数を知らず　されば村南村北の貴賤、悲しみ哭する音やむ事なし。此事天聴に達しければ、緒卿詮議あて彼を退治すべき其器をえらばれけるに、渡辺綱也。源五勅をかうぶり、彼蜘蛛を切平げしによりかく名付ける共申。

或又頼光或時発病せられしに、種々治術も叶はず。時によるく大なる蜘蛛、寝所に来ると思はれければ、此病しきりけり。其蜘蛛を件の太刀にて切られける故とも申す。

『太平記』巻第十六「本朝朝敵事」

（中略）されば天照太神より以来、継体の君九十六代、其間に朝敵と成て滅し者を数ふれば、神日本磐余予彦天皇御宇天平四年に紀伊国名草郡に二丈余の蜘蛛あり。足手長して力人に超たり。綱を張る事数里に及で、往来の人を残害す。然共官軍勅命を蒙て、鉄の網を張り、鉄湯を沸して四方より責しかば、此蜘蛛遂に殺されて、其身分々に爛れにき。

『平家物語』巻五「朝敵揃」

朝敵の始まりを神武天皇の御世における紀州名草郡高雄村の「一匹の土蜘蛛」とし、歴代の朝敵の名前を列挙する。当初朝敵として位置づけられていたのは源氏であったが、平家の数々の専横、とりわけ福原遷都により、様々な妖怪変化などの災厄が訪れたことにより、後に源氏の蜂起と平家追討の院宣が下され、平家が朝敵としてみなされるようになることを予感させる物語の重要な転換期を迎える。（注10）

これらのように説話集のなかで故事来歴としての土蜘蛛退治譚が挿入されるなかで、ひとつの纏まった物語として成立しているのは、能・謡曲などの芸能のテキストである。

謡曲『土蜘蛛』（『謡曲大観』「土蜘蛛」より本文抜粋）

ワキ「言語道断　いまにはしめぬ君の御威光劔のいとくかたくをもつて。近頃めでたき御事にて候。

後シテ「汝知らずやわれ昔。葛城山に年を経し。土蜘蛛の精魂なり。なほ君が代に障りをなさんと。頼光に近づ

き奉れば。却つて命を。断たんとや…（中略）

地「その時独武者進み出でて。汝王地に住みながら、君を悩ますその天罰の劔にあたつて悩むのみかは。命魂を断たんと。手に手を取り組みかかりければ

能・謡曲『土蜘蛛』の成立時期は定かではないが、能作者付や謡本の記録をたどると、少なくとも演目成立の上限は室町末期頃まで遡れるという。[注11] また、原田香織氏は、[注12] 室町時代において、世阿弥によって『平家物語』に取材した修羅能が多く制作されたことをうけ、時の足利政権（源氏政権）が行った『平家物語』と芸能の「語り」の管理を指摘している。即ち、源平合戦を経て源氏によって新たな完全なる「武家政権」が誕生したことで、『平家物語』の合戦譚が正統的な古典として権威化したのである。さらに氏は、そうした足利将軍家による『平家物語』の「語り」と修羅能の形成の試みは、「思想として源氏支配を強調し共同体の中心として「敗者」を幻影化し位置づけていく文化的な枠組の中での思想統制的な試みともいえ、平家に対する鎮魂と追悼を芸能という文化装置の中で国家的規模で展開することによって、室町幕府足利将軍家にとっての政治的記号となった」と言及する。このことを踏まえるならば、土蜘蛛退治譚の芸能化・演劇化によって、従来秘匿されていた「剣巻」の伝承を構造化した「語り」として整備したと考えられるだろう。

二、近世における土蜘蛛説話の受容と展開

前章では、近世以前の土蜘蛛退治譚の概要を確認した。古代日本において朝廷に帰順せずに政権を脅かした「朝敵

のはじめ」たる土蜘蛛が妖怪（あるいは精霊）として再び現れ世を乱すとき、清和源氏の血をひく源頼光とその家来たちが八幡神の加護と源氏伝来の宝剣を以てそれを退治して世に安寧をもたらし、王権の守護たる武門として繁栄するという武家の神話としての性格を有していることがわかった。それでは近世における土蜘蛛退治譚はどのように展開・変容したのだろうか。

二‐i、近世的受容―絵画作品から

同様に、頼光四天王による妖怪退治譚である『酒呑童子』や渡辺綱による鬼退治譚『羅生門』も江戸時代になってから盛んに絵本・絵巻化されるようになった。武士による鬼退治の物語は武家の読み物として好まれ、とりわけ徳川政権下においては、清和源氏に連なる血筋を持つ源頼光が国や朝廷を脅かす鬼や妖怪を退治する説話が好まれていた。(注13) 伝存する作品は多くはないものの、土蜘蛛退治譚もそのような絵巻や奈良絵本製作の一環として受容されていた。しかし、物語内容は中世に制作された東博本とはだいぶ異なり、別の物語体系であることは明らかである。以下の二作品からうかがえよう。

・『土蜘蛛』二巻（慶應義塾大学図書館所蔵　江戸時代前期）〔図5〕

物語構成は、上巻は、武家の棟梁としての源家の来歴と伝来する名刀の由来、更に頼光が神託により弓箭と兵法の道を会得する前日譚、下巻は「剣巻」と同様、頼光と四天王たちによる土蜘蛛退治譚となっている。特に上巻は他の土蜘蛛退治譚に類を見ず慶應本のみに所収された内容である。頼光が伊勢大神宮に参籠した折に、託宣によりかつて坂上田村麻呂が奥州征伐に用いた秘蔵の太刀「高丸」を賜ったこと、また別の日には夢告にて、楚国の弓の名手として

名をはせた養由（養由基）の娘・椒花女から「雷上動」という名弓を、八幡神から兵法の秘術を賜ったことが語られている。頼光の王権を守護する源氏としての「文武の徳」を称え、下巻の土蜘蛛退治へと繋がる布石とする。従来の「剣巻」系統土蜘蛛退治譚と異なる点は、源氏重来の宝剣に加え、名弓や兵法など武門の権威に資するものを授けられるということである。

『今昔物語集』巻二十五第六話「春宮大進源頼光朝臣、狐を射る話」では、三条天皇の春宮時代に大進として仕えていた頃、頼光が屋根で眠る狐を射るように命ぜられ、一度は辞退したものの、再度の要請に応じて射落としたエピソードがある。射落とした際に、「此れは頼光が仕たる箭にも候はず。先祖の恥せじとて、守護神の助けて射させ給へる也」と申し上げたという記述から、弓箭の道における神仏の守護の重要性を説いた内容である。

このような逸話から、新たに名弓「雷上動」を天照大神より賜ったという説話が挿入されたのではないだろうか。また、宝剣や弓などの「武」のみならず、「兵道」をもって知略を尽くす智将という「文」のイメージが付与されたのも、東博本との物語内容の相違はあれど、源氏が体現する「武威」とは「文武」を備えたものであるべき、という存在意義をこのような形で明示しているのである。

・『土蜘蛛草子』一巻（国立歴史民俗博物館所蔵　狩野渓雲筆　一七九九年）〔図6、7〕

物語内容は、病に苦しむ源頼光が僧形の妖怪に襲われて源家に伝来する宝剣・膝丸で切りつける場面から始まり、後日頼光と四天王が、北野社の大きな塚にひそむ巨大な土蜘蛛を討ち果たし、京の河原にその遺骸をさらすというものである。

奥書によると、「寛政十一己未歳（一七九九）九月／狩野渓雲来信筆」とある。『古画備考』によると、狩野渓雲は、

江戸時代における狩野派のうち、表絵師をつとめた十五家の一つ、かつての狩野松栄の門人・狩野宗心種永を祖とする築地小田原町狩野家の出自をもつ。記録によると、『土蜘蛛』制作の一年前、寛政十年（一七七八）に家督を継いで第一代将軍徳川家斉に拝謁し、本格的に画業を始めたとされる。(注14)

絵を見てみると、全体的に淡彩で、詞書の物語内容に沿って写実的に丁寧に描かれており、特に源頼光と四天王の武将たちの人物描写は典型的な狩野派の筆致を継承している。土蜘蛛は、冒頭で病床の頼光を襲う僧形の妖怪（土蜘蛛の変化の姿）として、後半で正体を現し大きな蜘蛛として描かれている。いずれも体毛や瞳に金泥を用いるなど、不気味でありながら尋常ならざる人智を超えた存在である異形性をよく表している。この土蜘蛛＝僧形の妖怪のイメージは、慶應本や後述の『武家繁昌』の土蜘蛛の姿にも同様に描かれるように、ある一種の造形的な共通認識であったことが指摘できよう。一方詞書に眼を転じてみると、抑揚は少ないながらも均一で整った筆致である。本絵巻の伝来は定かではないが、有力な武家あるいは町衆の依頼により制作されたと考えられよう。

・『武家繁昌』

このような再生産された土蜘蛛退治譚は、更に別の物語に組み込まれて伝承されることになる。『武家繁昌』は、中国や日本の武門に関わる歴史的説話を、武家とりわけ源氏の故事由来を説いたもので、江戸時代前期～中期にかけて奈良絵本や絵巻として制作され、現在にいたるまで十五ほどの伝本がある。(注15)

『室町時代物語大成十一』赤木文庫旧蔵「武家はんしやう　下」本文より抜粋（傍線は筆者による）

かくて、人皇の代に、いたつて、第一代、しんむ天皇の御とき、やまとのくに、かつらきの下のこほりに、つち

くもといふものあり

そのかたち、かしらにつのおひ、かみの色火のことし、まなこ大にして、ひかり有、かゝみのおもてに、朱をさしたることくなり、四のきは、くひちかふて、のこきりのことし、六の手、ふたのあしありて、はなたかたかしちから、つよくして、いしとはし、山をくつし、木をぬく、身より、白きいとを、くり出し、人をみては、打かけ引よせ、けたものを、まきころして、食として、人をなやまし、王命に、したかはす

天皇、すなはち、物のゝへの、みちおんのみことを、軍将として、兵をつかはして、せめ給に

土蜘、さらに、ことゝもせす、天にかけり、木するゑをつたひ、地をくくり、水をはしる、ちかくよるものをは、つふてにうち、とをくよるものをは、糸をなげて、しはりからみ、なけころされ、ひきさかれて

みかた、おほく、うたるれとも、つちくもには、矢もたゝず、ほこもとをらす、いくさやふれて、みかたのちはものみやこに、かへりのほりけり　さるほどに、天皇、ふかく、はかりことを、めくらし、くろかねの、あみをこしらへ、つちくもかすむ、あなをふさき、たきゝをつみて、やきころし給ひけり

ふようのみちは、これらを、おこりとして、はかりことのもとゝせり

それぞれの説話の主人公は、武士を率いる武神・天皇（皇帝）・将軍といった武を司る為政者であり、それらが正しく国を守護し統治することによって国土に安寧をもたらすという武家の神話テキストといえる。例に挙げられるのは、蚩尤を討つ黄帝、殷の紂王を討つ周の武王といった古代中国の英雄譚のほか、日本の先例として、神功皇后の三韓征伐、そして神武天皇の紀州名草郡の土蜘蛛征伐が語られている。そしてこれらの武威による悪逆を行うものを排除するものこそが日本武尊にはじまる将軍の由来と系譜である、と続ける。

ここで土蜘蛛の描写を詞書と絵で照らし合わせてみると、その姿は異形の化け物として表されており、多足多肢に武器や糸を持ち、巨大な背丈で武将たちに立ちはだかる様子で描かれている。この造形の典拠は、慶應本や歴博本と同様明らかに「剣巻」系統で語られる僧形の化け物としての姿である。ここでは古代の記紀神話における「異民族」としての土蜘蛛と、中世における「妖怪」としての土蜘蛛が融合した形で語られている。土蜘蛛の尋常ならざる強さをもって、天皇率いる朝廷軍は苦戦を強いられその多くが殺されてしまう。そこで、神武天皇は武力に頼らず知略を用い、「鉄の網をこしらえて穴をふさぎ焼き殺す」という一計で見事に土蜘蛛を成敗する。

ここで着目すべきは、『武家繁昌』の冒頭で語られる「それ、文武の二つの道は、天が下を治むる経緯なり。」の詞書に集約されている。即ち、文武二道は天下を治める基本であり、為政者は時勢に応じて文武を使い分け、世を安泰にしなければならないというものである。この文武二道に長けた源氏（将軍）こそ理想の統治という思想は、中近世の土蜘蛛退治譚に共通して語られていることであり、「源頼光による土蜘蛛退治」が源氏の武威と文威による統治の正統性の根源譚として極めて重要な位置を占めていたことがわかるだろう。（注16）

一方で、近世における土蜘蛛退治譚の絵画作品で忘れてはらないのは、浮世絵や版本での享受層の拡大である。武家の受容により「武家の神話」として秘匿され継承されてきた土蜘蛛退治譚は、民間に流布するようになって、武家神話としての性質は薄れ、より滑稽で外連味のあるキャラクター化された妖怪となったと考えられよう。鳥山石燕『画図百鬼夜行』などの妖怪辞典のほか、歌川国芳や勝川派などにより浮世絵として絵画化され広く流布した。例えば、「源頼光公館土蜘蛛作妖怪図」〔歌川国芳、天保十四年（一八四三）〕では、四天王と頼光が囲碁をしていると、土蜘蛛が次々に妖怪を操り出現させている。天保改革の風刺として描かれたとされる。

源氏が司る政権の極めて重要な根源譚である一方、人口に膾炙する土蜘蛛退治譚において土蜘蛛は新たなキャラク

ターを与えられ、武家神話とはまた異なった妖怪像が展開するようになった。

三、おわりに

最後に、土蜘蛛退治譚の時代的変遷のなかでの諸相を考えたとき、常に朝敵征伐の枠組みの中で語られている点はどの時代においても共通している。即ち土蜘蛛は、古代の朝敵征伐譚、そして中世の妖怪退治譚のフレームを経て、時の政権をおびやかすあらゆる負の外在因の象徴として古典化してきたと言えるだろう。

今回触れられなかった近世芸能における土蜘蛛の諸相を含めて、さらに大衆へと受容層が広がった土蜘蛛退治譚がどのように展開したのか今後考えるべき課題である。

注

注1　福島好和「土蜘蛛伝記の成立について」（『人文論及　二十一（一）』関西学院大学人文学会　一九七一年）、瀧音能之「土蜘蛛の原義について」（『象徴図像研究：動物と象徴』言叢社　二〇〇六年）、渡瀬淳子「「蜘蛛切」考―土蜘蛛説話の形成と漢籍」（『古典遺産　第五十三号』　二〇〇三年）『新編日本古典文学全集　古事記』『同　日本書紀』『同　風土記』小学館）

記紀神話における土蜘蛛に関する記述を概観すると、①朝廷に帰順せず、②異様な身体的特徴や穴居生活などの未開性、また呪術的・祭祀的指導者としての要素を有する記述が多く、朝廷に帰順しない土蜘蛛を征伐する記述が多い。また、葛城群の土蜘蛛征伐の記述は〔瘧型土蜘蛛説話〕における朝敵の由来として頻繁に引用さ

れる。

「（前略）又、高尾張邑に、土蜘蛛有り。其の為人、身短くして手足長く、侏儒と相類へり。皇軍、葛の網を結きて、掩襲ひ殺しつ。因りて改めて其の邑を号けて葛城と曰ふ。」（『日本書紀』神武天皇即位前己未年春二月）

「堡を造りて隠り、皇命に従わず」（『肥前風土記』小城郡）

注2　伊藤慎吾「異本『土蜘蛛』絵巻について」（『室町戦国期の文芸とその展開』三弥井書店　平成二十二年）、山本陽子「東京国立博物館本「土蜘蛛草紙」絵巻と人形芝居―特異な筋立てと絵画表現の理由について―」（『明星大学研究紀要第二十三号』　平成二十七年）、二八六頁、土蜘蛛退治譚の要素比較表を参照

注3　佐藤謙三・春田宣編『屋代本平家物語』（桜楓社　一九七三年）、『室町物時代語大成　九』（角川書店　昭和五十六年）。

源頼光の父・多田満仲の代に、天下安寧を守るべく源氏の二つの宝剣「鬚切」「膝丸」が作られ、頼光に受け継がれる。頼光の代になると「様々の不思議」が起こり、渡辺綱による鬼女退治と頼光四天王による土蜘蛛退治を経て二振りの宝剣はそれぞれ「鬼切」と「蜘蛛切」に改名する。この土蜘蛛退治譚は東博本の内容と大分異なっている。ある夏、瘧病を長く患った頼光のもとに、丈七尺ばかりの巨大な法師姿の化け物が現れ、頼光に襲いかかるが、「膝丸」でそれを斬りつけ事なきを得た。後日、四天王たちがその血痕を辿り、北野山中の「大なる塚穴」を見つけ、潜んでいた「山蜘」を引きずり出して退治する。これにより「膝丸」は名を改め「蜘蛛切」となった。「剣巻」諸本には、源氏に代々継承される宝剣に関する説話が所収されており、そのなかでも土蜘蛛退治譚は若干の相違はあるもののほぼ同様の内容が見られる。

注4　美濃部重克・美濃部智子『酒呑童子絵を読む：まつろはぬものの時空』（三弥井書店　平成二十一年）、セリン

ジャー・ワイジェンティ「換喩から提喩へ―『剣巻』における歴史の形象」『國文學：解釈と教材の研究　五十二（十五）』（学燈社　二〇〇七年）。この武家による王権・王法守護論は、十三世紀初頭、承久の乱（一二二一）前後に摂関家出身の天台座主・慈円が『愚管抄』に著して提唱し始めたという。

注5　上野憲示「「土蜘蛛草紙」について」（小松茂美編『続日本絵巻大成十九　土蜘蛛草紙　天狗草紙　大江山絵詞』中央公論新社、一九八四年）、黒田彰「剣巻覚書―土蜘蛛草紙をめぐって―」（長谷川端編『新典社研究叢書七十一　太平記とその周辺』新典社、一九九四年）、小松茂美「『土蜘蛛草紙』『天狗草紙』『大江山絵詞』―異形・異類の物語」（『続日本の絵巻二十六　土蜘蛛草紙　天狗草紙　大江山絵詞』）、渡瀬淳子「「蜘蛛切」考―土蜘蛛説話の形成と漢籍」（『古典遺産　第五十三号』二〇〇三年　九月）、水野僚子「土蜘蛛草紙に描かれた女性の身体―図像と解釈言説の再生産をめぐって」（『ジェンダー史叢書四　視覚表象と音楽』明石書店　二〇一〇年）、拙稿「東京国立博物館蔵「土蜘蛛草紙」の物語フレーム再考」（加須屋誠・藤原重雄編『中世絵画のマトリックスⅡ』青簡舎　二〇一四年）

注6　前掲注1渡瀬論文、同「土蜘蛛説話の形成と漢籍」（『室町の知的基盤と言説形成：仮名本『曾我物語』とその周辺』　二〇一六年）、元木泰雄『源満仲・頼光―殺生放逸・朝家の守護』（ミネルヴァ書房　二〇〇四年）。源頼光は、物語世界においては、人智を超えた妖怪退治を担う英雄として巷間に広く知れ渡っているが、史実での実態は、摂関家に仕える軍事貴族であり、朝廷の守護を担う武士として活躍した。

注7　前掲注6元木論文、河音能平『大阪の中世前期』（清文堂　二〇〇二年）、生駒孝臣『中世の畿内武士団と公武政権』（戎光祥出版　二〇一四年）

注8　前掲注4黒田論文、内田康「『剣巻』をどうとらえるか―その歴史叙述方法への考察を中心に」（千明守『ひつ

じ研究叢書〈文学編〉3　平家物語の多角的研究：屋代本を拠点として』（ひつじ書房　二〇一一年）

注9　前掲注3

注10　兵藤裕巳『王権と物語』（岩波書房　二〇一〇年）より第Ⅲ章「王権的時空と反世界」

注11　小林健二「能《大江山》と「大江山絵詞」」（人間文化研究機構国文学研究資料館 編『国文学研究資料館紀要文学研究篇35』二〇一二年）

注12　原田香織「能楽における『平家物語』の再構築」（鈴木則郎『平家物語〈伝統〉の受容と再創造』おうふう　二〇一一年）

注13　徳田和夫編『お伽草子：百花繚乱』（笠間書院　二〇〇八年）

注14　前掲注2伊藤論文

注15　中野幸一編『奈良絵本絵巻集九（長恨歌・武家繁昌・藤袋の草子）』『同　別巻二　武家繁昌（二）、うつほ物語（二）』（早稲田大学出版部　一九九八年）、中島美弥子「『武家繁昌』の表現―八幡をめぐって」（『立教大学日本文学八十五』二〇〇〇年）、金英珠「『武家繁昌』の神話言説：国譲り神話を中心に」（『立教大学日本文学111』二〇一四年）、仙海義之「奈良絵本「武家繁昌絵巻」」『阪急文化研究年報三』二〇一三年）

注16　ロジーナ・バックランド「在外コレクションにみる近世やまと絵の展開」（下原美保編著『近世やまと絵再考：日・英・米それぞれの視点から』（ブリュッケ　二〇一三年）、橋本正俊「源氏濫觴の物語」（日下力監、鈴木彰、三澤裕子編『いくさと物語の中世』汲古書院　二〇一五年）

〔挿図出展〕

図1、2、3　『続日本絵巻大成十九　土蜘蛛草紙・天狗草紙・大江山絵詞』（中央公論社　一九八四年）

図5　『慶應義塾図書館所蔵　図解御伽草子』（慶応義塾大学出版会　二〇〇三年）

図6、7　『異界万華鏡―あの世・妖怪占い―』（国立歴史民俗博物館　二〇〇一年）

図8　『奈良絵本絵巻集九　長恨歌・武家繁昌・藤袋の草子』中野幸一編（早稲田大学出版部　一九八九年）

図9　『　同　　別巻二　武家繁昌（二）、うつほ物語（二）』（同右）

〔附記〕本稿は、国文学研究資料館共同研究（課題）「怪力乱神の文学―怪異・神秘・混乱―」の成果の一部です。執筆にあたり、作品調査に御協力いただきました国立歴史民俗博物館には、ここに記して深く御礼申し上げます。

「土蜘蛛草紙」（東京国立博物館所蔵　南北朝時代）

図１　第７段　美女の化身と頼光

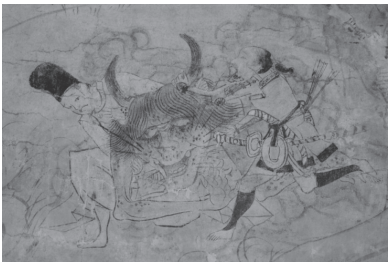


図２　第９段　棟倉から土蜘蛛を引きずり出す頼光・綱主従

図３　第 10 段　土蜘蛛と頼光・綱主従の応戦

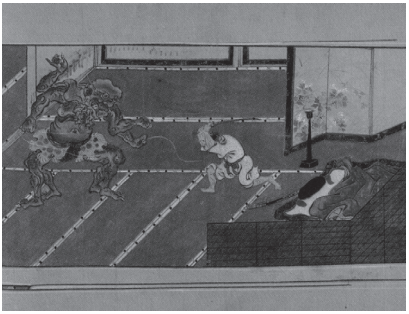
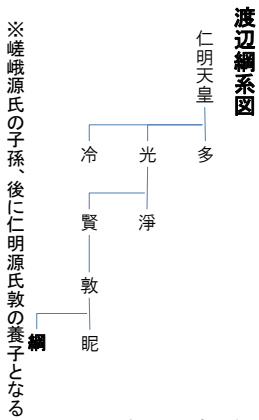


図５「土蜘蛛　下」（慶應義塾図書館所蔵　江戸時代前期）
第８図　頼光を襲撃する土蜘蛛



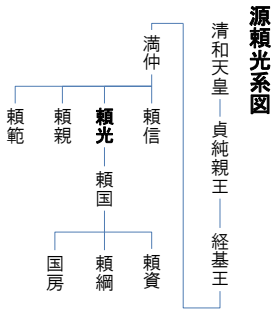


図４　源頼光・渡辺綱略系図　※『尊卑分脈』を参照

「土蜘」（国立歴史民俗博物館所蔵　寛政 11 年（1799））

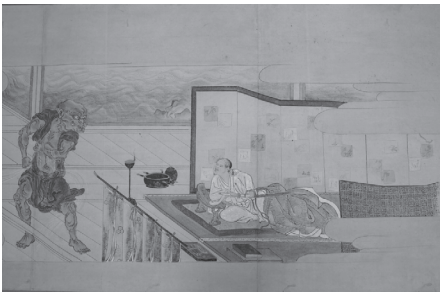


図 6　頼光に遅いかかる僧形の妖怪（土蜘蛛）

図 7　四天王と藤原保昌らに捕らわれる土蜘蛛

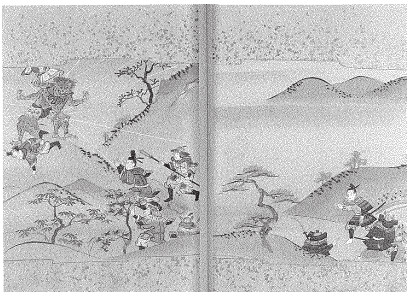


図 8 「武家繁昌　下」土蜘蛛
（赤木文庫旧蔵）

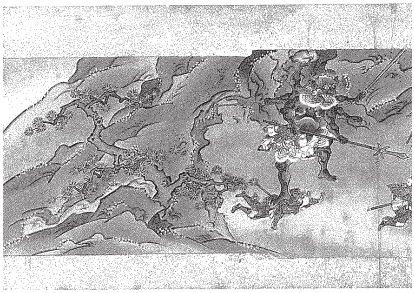


図 9 「武家はんしやう　下」土蜘蛛
（学習院大学所蔵）